

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 李文平

論 文 題 目

中国人日本語学習者のためのコロケーション学習の指導法に関する基礎的研究
—作文データに基づく「名詞+を+動詞」のコロケーションを中心に—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 杉浦正利

委員 名古屋大学 教授 藤村逸子

委員 名古屋大学 准教授 大島義和

論文審査の結果の要旨

1 本論文の概要と構成

本論文は、日本語学習における困難点の一つであるコロケーションの指導法に関する基礎的研究として、中国人日本語学習者の日本語作文データを使い、「名詞+を+動詞」のパターンのコロケーション表現の分析を行い、学習上の困難点の指摘とともに、母語の影響に関し特に「直訳」という学習者の言語使用ストラテジーを客観的に特定する判断手順を提案し、誤用の起きる主要な要因の一つである母語の直訳の果たす役割（正の転移と負の転移）を客観的に検証できるようにし、今後、コロケーションの指導法に関して直訳に関連する問題を具体的に議論できる基礎を提供した研究である。

本論文の構成は、8章から構成されており、また、分析対象とした正用・誤用コロケーションの項目など詳しい資料が添付されている。

第1章 序論

第2章 先行研究

第3章 母語の影響に関する理論的基盤

第4章 研究方法

第5章 言語習熟度の異なる学習者によるコロケーションの使用状況

第6章 コロケーションに関する誤用分析

第7章 コロケーション使用における母語の影響

第8章 本研究のまとめと今後の課題

第1章の序論では、日本語学習者にとってのコロケーションの問題に関する研究の概要をまとめ、本研究で取り組もうとしている研究課題の位置づけと研究目的およびアプローチのしかたについて説明した後、本論文の構成を説明している。

第2章では、本研究におけるコロケーションの概念と、第二言語としての英語および日本語のコロケーションの習得に関する先行研究のレビューを通して、第二言語におけるコロケーション習得の問題点と課題、そしてそれに対し、本研究ではどのような改善案を提案しようとしているかを説明している。

第3章では、第二言語におけるコロケーションの習得に関する理論的基盤として、まずは語彙習得のモデルにおいて、母語の影響を説明するには **Kroll and Stewart (1994)** のモデルよりも **Jiang (2000)** の語彙習得モデルの方が習得プロセスまで扱っているという点で説得力があることを議論し、その後、語彙からコロケーションへ習得の単位を広げることができるかどうかを議論している。さらに、**Wolter (2006)** の語彙ネットワークモデルを使うことで、母語の正の転移だけでなく負の転移がなぜ起こるかも説明できることを議論している。

第4章で、本研究の研究方法について、使用するコーパスとそこからコロケーションを抽出する方法を説明し、本研究における誤用分析の方法と合わせて、直訳の客観的な判断方法を提案している。使用するコーパスは筑波大学で公開されている『日本語学習者作文コーパス』(JC Corpus)であり、このコーパスを使用する理由として、日本語学習者が日本語で作文を書いただけでなく、その作文の母語による対訳を学習者自身が書いたデータが備わっていること、そして、学習者の語彙テストと文法テストの成績が備わっていること、そしてこれらのテストに基づいた階層クラスター分析により学習者群が習熟度別に初級・中級・上級と分けられていることを説明している。この JC Corpus はこのように単に作文データだけでなく他の情報も含まれているため、第二言語習得研究のデータとしては

論文審査の結果の要旨

貴重であるが、規模が比較的小さいという欠点もある。その点を、補うため、本研究で取り扱うコロケーションパターンの分布が、他の大規模コーパスにおける分布と比べ、偏っているわけではないことを検証している。また、誤用分析の方法として、曹・仁科（2006）の分析方法を改良した方法を提案し、その判断手順を詳細に説明しているとともにフローチャートにまとめた。また、母語の影響を判断するための直訳の客観的な判断方法についても、単に正誤ではなく、重みづけをおこなうことにより直訳を程度の問題であるにとらえた上で、客観的なスコアの算出方法を提案し、その算出方法を検証している。

第5章では、学習者の習熟度の違いという観点から、学習者のコロケーションの使用状況を分析している。第二言語におけるコロケーションの習得は、英語を対象言語とした先行研究では上級になっても困難であるという指摘があり、それを本研究では日本語を対象として、日本語能力、語彙能力、文法能力の3つの観点から分析をしている。結果としては、いずれの観点においても、初級・中級・上級という熟達度において、コロケーションの運用能力（正用率と誤用率の関係）には差は見られないということが観察された。これにより、対象言語を日本語とした場合においても、第二言語としてのコロケーションの習得が困難であるということを示し、日本語教育において、コロケーション指導を重視すべきであると主張している。

第6章では、コロケーションの使用に関する誤用分析を学習者の習熟度別に行っている。これは、日本語教育において、コロケーション指導を重視する際に、どのような点に注意することが効果的な指導につながるかを明らかにするためである。本章では、第4章で詳述した誤用分析の方法を使い、習熟度別に学習者データにおける誤用の分析を行った。その結果、「造語」や「文法関係」などにくらべ狭義の意味での「共起」タイプの誤用が多いことが明らかとなった。これにより、「共起」タイプの誤用は、上級者になっても自然に習得されるわけではなく、コロケーションに重点を置いた指導が必要であると主張している。

第7章では、第二言語としての日本語のコロケーションの誤用が起きる原因として、コロケーションの使用における母語の影響について、独自に考案した直訳関係の判定方法による分析を行い、その分析結果に基づき母語の影響を考察している。これまでの研究においても母語の影響や直訳という要因が取り上げられているが、いずれも分析者の「直感」による判断で分析されており、具体的な判定手順が示されていない。本章では、第4章で説明した判定方式により、誤用とされた表現を分析した結果、約6割が直訳であることが明らかになった。これらの直訳が原因と考えられる誤用の表現について日本語学習者が使用した日本語の教科書4冊での出現を調査したところ、教科書に出現していないものの誤用が多いだけでなく、出現していても出現回数が少ないことが明らかになった。これにより、母語による負の転移が起きたことが示唆される。また、これらの直訳が母語（中国語）からの直訳であることを検証するために、韓国語母語日本語学習者を対象に翻訳課題をし、韓国語母語日本語学習者からは同様の直訳表現は出現しないことを確認している。母語による影響は負の転移だけではなく正の転移が起きる場合もある。実際、分析対象としたコロケーション表現で直訳と判定された表現のうち9割近くが正用であった。このことから中国語母語日本語学習者の母語の転移においては、正の転移が多く、これによりコロケーション表現の習得を促進することもできるが、逆に、誤用となるものも母語からの負の転移に原因の多くがあると考えられ、その点に注意して指導を行うことが日本語教育では必要であると主張している。また、本章の最後で、こうした母語の転移に関する分析結果をふまえると、Jiang (2000) の語彙習得モデルをコロケーション表現の習得にも拡張できると主張している。

第8章で本論文のまとめを行うとともに、日本語教育への具体的な示唆を行っている。すなわち、

論文審査の結果の要旨

中国人日本語学習者にとって、コロケーション表現は、上級になっても自然に習得されるわけではないことから、教育によってコロケーションを意識させ指導する必要があること、コロケーション表現に関する誤用のうち「共起」タイプの誤用が一番多いこと、そしてその誤用は、中国語からの直訳による誤用であるため、今後の日本語教育においては、母語による正の転移による学習を促進しつつも負の転移による誤用に注意し、直訳では誤用となる表現リストを作成し負の転移を防ぐ指導をすることを提案している。最後に、今後の課題として、さらに大規模なコーパスでの検証が必要であることと、コロケーション表現の誤用が実際のコミュニケーションにどの程度の影響を与えるかを検証することをあげている。

2 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- (1) 日本語教育におけるコロケーションの重要性に関する先行研究を広範囲にカバーしており、先行研究の批判的なレビューに基づき、独自の分析方法を提案している。
- (2) 分析対象としたコーパスの規模は小さいが、分析対象とするコロケーション表現の分布を大規模コーパスと比較し、その欠点を補ったうえで分析をしている。
- (3) 誤用に関する判断手順をフローチャートで示し、今後の研究において、誤用の判断を直感ではなく具体的に判断手順を検証できるようにした。
- (4) 直訳に関する判断手順を具体的なスコアとして算出・判断できる方法を考案し、その信頼性を検証し、今後の研究において直感ではなく具体的な検証を行えるようにした。
- (5) 韓国語母語日本語学習者の翻訳課題により、直訳が中国語からの直訳であることを検証している。この翻訳課題方法も今後の研究にとって参考になる。
- (6) 中国人日本語学習者にとっては、母語からの正の転移によりコロケーション表現の多くは学習が促進されるが、逆に、誤用については母語からの直訳による負の転移であることを明らかにした。

ただし、本論文は以下の点において改善すべき点があることが指摘される。まず、コロケーション表現の分析において、表現の出現回数のみを分析対象としているが、表現の種類という観点から分析をすることで、少ない表現の過剰使用や、表現の多様性という問題を取り扱うことができるはずである。こうした観点から見直すことにより、量的な変化はなくとも熟達度が上がることによる質的な変化をとらえることができる可能性がある。二点目は、誤用分析の方法として曹・仁科（2006）の分析方法を改善してはいるが、個々のカテゴリーの定義に曖昧さが残っており、今後の検証が必要である。また、今回使用したデータにおいては、学習者自身による母語の対訳がついているため、書き手の意図を確認でき誤用分析が行えたが、学習者コーパスの全てにこうした学習者自身の母語による対訳がついているわけではなく、むしろない場合が多く、そうした場合に、本研究で提案されている誤用分析の判断基準がどの程度有効なのかかわからない。最後に、本研究により Jiang (2000) の語彙習得モデルをコロケーション表現の習得にも拡張できる可能性を主張しているが、Jiang のモデルはその前提として、一つのまとまり（単語）の内部情報を4種類に分けて習得過程を説明しているため、コロケーション表現を一種の語彙項目であると想定すればそのモデルの拡張は可能であろうが、複数の項目間の関係については Jiang のモデルは説明していない。ゆえに、Jiang のモデルの拡張を主張するに

論文審査の結果の要旨

は、項目間の関係に関する説明の精緻化が必要ではないかと指摘される。

こうした弱点はあるものの、従来の日本語教育におけるコロケーション習得の困難さに関する研究を、さらに前進させる上で、本論文が提案している具体的な分析方法とそれを使った研究成果は、より多くのデータで検証されることにより、日本語教育におけるコロケーションの指導に関する研究に大きく寄与するものと評価できる。

3 結論

以上の評価により、本論文は、博士（学術）の学位に値するものであると判断する。